

KSKQ

イマージュ

2022年2月

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

金満里ソロ公演 『漆黒の赤』



金満里五作目となるソロ作品
 前作『寿ぎの宇宙』から九年を経て
 新たに挑む、至高のソロ

はじまりは
 おんな、ではなからうか、と
 空間と時空に向かって、溪谷を昇降する、
 はじまりへと

『漆黒の赤』 金満里ソロ・アイホール提携公演

3月11日 (金) 19:30
 3月12日 (土) 14:00 / 18:30
 3月13日 (日) 13:00

会場 AI・HALL (伊丹市立演劇ホール)
 チケット絶賛発売中

『漆黒の赤』は、どこから…

世が終末をむかえた後は、なにが残り、そこから又なにが始まるのだろうか。漠然とした問いを発してみて、ふと、浮かんだのが、念、であった。そこを身体の舞で、私は問題にしていく時期に来たのだな、と。

予てからやりたかった、アフリカの大地溝帯、がある。

大地溝帯の形成は、地球内部のマントルの対流と関係していて、マントルの上昇流が大陸分裂の主要因と考えられている。

地球の表層に現れるマントルの上昇流が、火山や巨大な谷を作り大陸を分離する力になっている。その底を覗けば、地殻のマントルにつながる、次元超えの大地溝帯がある。

裏と表をつなげる裂け目、が大地溝帯だ。

大地溝帯が人類発祥の地、という説は現在では否定されているが、態変がアフリカ・ケニア公演をしたときにはまだ通用していた当時から、人類の起源と行く末を思考する身体表現を目指している。

大いなる地球現象も宇宙的力学に添うものだろう。

ここでは、人類も一吹き刹那以上に短い命。

だが、

敢えて、ここにいる、というエゴをどこかに刻む足掻きをさせてくれ。

念、を刻む

宇宙にパツクリと、口を開けさせる、はじまりは

おんな、ではなからうか、と

空間と時空に向かって、溪谷を昇降する、はじまりへと

金満里



『漆黒の赤』

書 華雪

金満里五作目となるソロ作品『漆黒の赤』

前作『寿ぎの宇宙』から九年を経て

新たに挑む、至高のソロ

金の追求する身体表現は、身体の奥にある精神性を抽象的に表現しようとしてきました。

本作では、破壊の方向に向かい続ける人類の未来が、その破壊に行ききった時、行き着く先に再び立ち上がるものがあるのではないかと、ということ、その身体で探りたいと願います。アフリカの大地溝帯や火山の中に力強い命の根源を見出しながら、それと呼応する蠢く想念のようなものが女の身体の中にあるのだという確信が、形となつて、まさにこの舞台上に立ち現れていくことになるでしょう。

金は、舞踏の祖である大野一雄氏と、大野慶人氏との出会いをきっかけに自身のソロ作品創作を始めましたが、一昨年前に慶人氏が亡くなられ、師と仰いできた二人を失うこととなりました。その後初めて取り組むソロ作品は、師の教えを核心に抱きつつ、これからの自身の身体表現を突き詰める覚悟と出発の舞であります。

ここに華雪の書と、蝦名宇摩による津軽三味線の音が加わり、一期一会の空間が生み出されることとなりました。

金の身体だからこそ表現できる人間普遍の美をもつて、命の真髄を探る渾身の舞台へ、どうぞ注目ください。

(劇団態変制作部)

劇団態変主宰・金満里さんの3月のソロ公演で、舞台美術として関わらせていただくことになりました書家の華雪です。

先日、満里さんが横浜で行っていたわたしの展示に来てくださいました。ゆっくり書の間を車椅子で巡る満里さん。その様子を眺めていると、満里さんの公演にいつか自分の書を置かせてもらえる機会があればという、以前の思いが強くなりました。今度のソロ公演で書と一緒にやってみたい。満里さんが、わたしを見てふと言ってくれた。思い描いたことがこんなふうに出ることに胸が躍る。

* 初めての舞台美術制作です。

『漆黒の赤』と題された舞台。

「黒」とは、「赤」とは何を意味するのか。一見、黒と言われる墨色に五彩があるといったのは古代のひとつでした。

満里さんの場を、墨と字でどんなふうに移ることができなのか、今からのしみです。

演奏 蝦名宇摩 (津軽三味線)

『漆黒の赤』に染まる

奄美大島の小さな集落で、蛇皮線で奏でる島唄を聴いて育った。でも、魅せられたのは東北の激しい太棹の音色。雪深い北国で、ボサマが生きる為に奏でたこの激しい音色に心奪われた。私は迷うことなく三味線弾きの道を選び、子どもたちと生きていくのがむしろに太棹を奏で丸30年。ボサマが盲目の闇で奏でた三本の糸から生まれる音は、どの様に金満里の世界と絡み合っていくのか・・・幕が上がるその時、漆黒の赤の世界にどっぷり染まる。

大野慶人先生のこと

金満里のソロ作品はこれまでに4作を数えますが、それらは全て、舞踏家の大野慶人先生のご指導で創ることのできた作品でした。その大野慶人先生が亡くなってしまい、5作目の「漆黒の赤」は心細くも金満里が独り立ちして苦心惨憺創り上げた作です。

ここに大野慶人先生、そして大師匠の大野一雄先生の思い出を綴ってみます。

まず前提知識。舞踏（暗黒舞踏）とは、1960年代に土方巽と大野一雄により創始された前衛舞踊の様式で、西欧近代の舞踊の調和・美・形式・天上界への跳躍といった志向に対し、過剰・醜・情念・地べたのなかにこそ見いだせる倒錯した美を追求してきたと言われます。大野一雄の「ラ・アルヘンティーナ頌」が1980年にナンシー演劇祭（仏）で衝撃を与え世界でButonとして認知され出しました。大野一雄先生は踊りだしたらデタラメの限りを尽くしてしまういわば怪物でしたが、共演しつつその舞踏世界の監修をやり遂げてきたのが大野慶人先生（一雄先生の次男）でした。

大野一雄先生と劇団態変の出会いはいは1993年。先生は身障者の身体性に魅入られたように一人の態変役者にとりついて離れなかった。そして1994年には劇団態変と大野一雄先生のコラボレーション「山が動く」が実現しました。ところがその企画は正統派の評論家筋には受け入れ難く「大野一雄が歴史に名を残すには受けるべきではなかった」とまで書いた人もいたのです。一雄先生当人は全く意に介さず1996年には二度目の共演が実現しました。おそらく慶人先生が酷評の矢面に立ってくださったのではないのでしょうか。

1998年に金満里の母・金紅珠（戦時中の日本で被植民地・韓国の古典を演じ続けた気骨の芸術家）が亡くなり、その喪失感から金満里は自らのソロ作品「ウリ・オモニ」創作を思い立ちます。これは大野一雄先生の代表作「わたしのお母さん」へのオマージュでもありました。その監修・振付を大野一雄先生・慶人先生がお引き受けくださいました。その稽古は、まず慶人先生が形を創ります。「一寸先見えない闇に向かってミリ単位で

進んでください。身体をはさんで、生と死の方向があるんです。頭が生へ、足が死へ。逆かもしれない。未だ産まれぬ胎児の命はどこへ向かうのか。この場面の本質はそれです。」それに従って動きを創っていくと、一雄先生から「部分ではない、いのち全体が動いてなければ」と自ら踊りながらの指導が入る、といった具合でした。金満里のソロの2作目「月下咆哮」もそのようにして創っていただきました。

大野一雄先生は2000年末に転倒事故で臀部を痛め立つことができなくなつてからも車イスに乗ったままの手での踊りで我々を魅了し続け、ベッドで寝たきりになつてからも踊りは止めず訪れる人にインスピレーションを与え続けました。大野一雄先生の舞踏の本質を一言で言い表すなら「命を大切に」に尽きると思われます。古い病み障碍を得てどんな姿になろうとも、その命を大切に踊りに込める。大野一雄先生は生涯をその実践で貫かれたのだと思うのです。

2010年に大野一雄先生が亡くなつて、慶人先生の憔悴ぶりは傍からも心痛むものがありました。偉大すぎる大野一雄の影から脱して芸術家として独りで立つていく活動をやり遂げられ、その合間には劇団態変や金満里にもなにくれとなく厳しくも暖かな交流を続けてくださり、金満里のソロ「天にもぐり地にのぼる」「寿ぎの宇宙」を慶人先生の監修で創り上げることができました。2019年2月の「ウリ・オモニ」再演では、カーテンコールの舞台に大野一雄のパペットと共に上がってください金満里と共に踊ってくださいました。

その年の7月まで慶人先生は世界をまたいで公演に指導に活躍しておられたのに、病にたおれ2020年1月8日に81歳で亡くなられました。この喪失感2年を経てもまだ埋めることができていません。

（文責 仙城真）



(C) N.Ikegami 2019年2月「ウリ・オモニ」カーテンコールより

公演報告

Y P A M 2 0 2 1

『さ迷える愛・序破急』三部作

丸岡ひろみ

態変の三部作『さ迷える愛・序破急』を昨年12月、横浜国際舞台芸術ミーティング（Y P A M）にて上演しました。Y P A Mとは、国内外の舞台芸術の専門家を主な対象として25年実施されてきた、国際会議兼フェスティバルのような催事です。私はY P A M 2021のウェブサイトに、主催者からの挨拶として次のように記しています。「・・・完結編『心と地』は、コロナ禍の中での三度の延期を経て、今年11月に伊丹アイホールで初演されます。資本主義と管理社会の行く末を問うSFになるそうです。その問い、そして感染症に対する脆弱性が高いと言われる重度身体障害者の劇団が粘り強くライブ上演にこだわったという事実から、私たちはまだ何かを学ぶことができるでしょうか」。

この公演は、ただでさえ感染症対策により負荷が上がっている中で厳しい仕込み・リハーサルの日程をこなし、毎日異なる作品を同じ会場で三夜連続で上演したというだけではなく、舞台がプロセニアム・アーチと高い天井を持つMANU神奈川芸術劇場のホールだったことにおいても異例でし

た。いわゆる額縁舞台です。そこに言わば晒されるように「低く」「転がる」態変の身体性がこれまで以上に良い意味で劇的に現出し、改めて態変の表現が孤高の反演劇、唯一無二の身体芸術の実践としていかに高められているかが、これまで以上にはっきりと映し出され、態変の舞台を過去に見たことのあるお客様にも新鮮さを伴った衝撃を与えることに成功したと思います。意味のある舞台芸術の創作はもはや不可能ではないかと思われ日々にあつて、舞台芸術に取り組むあらゆる人々が希望を得られる舞台だったと思います。

この上演を成立させてくださった主宰の金満里さん、出演者・メンバーの皆さん、そしてともに創作に関わったスタッフの皆さんの偉業に、この場を借りて改めて深い敬意を表したいと思います。この奇跡の上演の感動も覚めやらぬ中、9年ぶりに取り組まれる金さんのソロ公演を心から楽しみにしています。

Photo by Hideto Maezawa



『翠晶の城 - さ迷える愛・序』 12月17日



『箱庭弁当 - さ迷える愛・破』 12月18日



『心と地 - さ迷える愛・急』 12月19日

丸岡ひろみ（まるおか・ひろみ）

PARC - 国際舞台芸術交流センター理事長、Y P A M - 横浜国際舞台芸術ミーティング（旧 TPAM）ディレクター、舞台芸術制作者オープンネットワーク（ON-PAM）副理事長。2003～2010年、ポストメインストリーム・パフォーマンス・アーツ・フェスティバル（PPAF）共同ディレクター。TPAMと併設してIETMアジア・サテライト・ミーティング（2008、2011年）、アジアの制作者を集めた「舞台芸術制作者ネットワーク会議」（2009年）を開催。2012年にはフェスティバル「サウンド・ライブ・トーキョー」を創設。



映像紹介

態変Youtubeチャンネルで公開中！

① 金満里の仕事シリーズ 「態変の創り方・金満里の仕事」



演出家・金満里の仕事に焦点を当てた映像アーカイブ化に取り組んでいます。現在公開しているのは、昨年のアイホール公演『心と地』の稽古から場当たりを追った4本と、YPAM2021 招聘公演「さ迷える愛・序破急」三部作上演に向けた製作過程の2本。生の、態変舞台の裏側へ、ご案内いたします。

映像リスト <https://onl.la/HeuGFbX>

- (その1) 『心と地 - さ迷える愛・急』 9/26 稽古
- (その2) 『心と地 - さ迷える愛・急』 ※黒子への関わりを中心に
- (その3) 『心と地 - さ迷える愛・急』 最終稽古
- (その4) 『心と地』 場当たり ※劇場でのリハーサル現場
- (その5) 『翠晶の城』 オーディション in KAAT
- (その6) YPAM2021 劇団態変「さ迷える愛・序破急」三部作 最終稽古編

② 劇団態変『ラ・パルティエダ ～出発' 06』 テント公演



2006年9月収録 於 / 扇町公演特設 NGR 雷魚テント

劇団態変の数ある作品の中でも、特に印象に残っていると評判の高い『ラ・パルティエダ ～出発' 06』。本作は、チリの軍事クーデターの際に虐殺された大衆的歌手のビクトル・ハラを中心に描いた群像劇です。

一期一会のミュージシャンたちの音楽とともに映像に残る、伝説のテント公演。 <https://youtu.be/nWzWXQbRcm0>



©Kohji Fukunaga(Studio Epoque)

③ 劇団態変『夢みる奇想天外 (ウェルウィッチア)』



1992年5月収録 AI・HALL 自主企画 VOL.37

態変が世界へ飛び出していった時期の意欲作。(この公演の4ヶ月後に、はじめての海外公演をケニア三都市で決行しています。)天三部作、として、態変はじめての三部作に数えられた作品でもありました。30年前の映像なので画質はあまり良くないですが、舞台表現の限界をひっくり返す態変の魅力がこれでもかと詰まった作品で、一見の価値有り。貴重な映像公開です！ <https://youtu.be/gN4HjIC9zME>



劇団態変 賛助会員制度 (2022年度) 会員募集

現在、劇団態変では2022年度の賛助会員を募集しております。

今年度も昨年度と同様、新型コロナウイルスが猛威をふるう中、劇団アトリエであるメタモルホールでのイベントはほとんど開催出来ませんでした。しかし、このような状況にあっても、昨年11月には、伊丹市AI・HALLにて『心と地～さ迷える愛・急～』の上演を3度におよぶ延期を経て実現することができ、つづく12月には、横浜国際舞台芸術ミーティング2021 (YPAM2021) からの招聘を受け、さ迷える愛三部作公演を成功裏に終えることができました。

そして、このDMでご案内していますように、2022年3月には9年ぶりの座長の新作ソロとして、『漆黒の赤』の上演を迎えられる運びとなりました。

こうした活動が継続できておりますのも、皆様からのご支援に支えられているからに他なりません。今後も皆様からの期待にこたえるべく、芸術活動に専心し、社会の閉塞状況に挑戦する作品を創造していきたいと考えております。

どうぞ、今後とも変わらぬご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

(パフォーマー／小泉ゆうすけ)

年会費

個人会員(年会費) 一口 5,000円
 法人会員(年会費) 一口 20,000円

会員特典

- ・会員証発行
- ・劇団態変公演ダイジェスト映像DVD進呈(年1回)

入会方法

郵便振替

同封の振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変

PayPal

メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用いただけます。劇団態変HP → 日本語TOP → 「賛助会員制度」にお入りください。

(個人会員特典)

チケット料金500円割引

(法人会員特典)

一作品1名様ご招待

情報誌イマージュ vol.81 2021年冬号

特集● 「食」

食の小宇宙、が満載と大好評にて発売中です！

クロスオーバー談義●

藤原辰史(京都大学人文科学研究所准教授) × 金満里

「食べて出す、間を耕し世界をつなげる」

宇宙から賑やかな微生物の共生世界まで自在に駆け巡る奔放な対談を、脳だけでなく皮膚も内蔵も総動員で味わってください。



絶賛発売中 詳細は ホームページ <http://taihen.o.oo7.jp/imaju/imaju.htm>

1冊：500円 / 年間購読 1500円(年3回・送料込) バックナンバー3冊 1000円

<購入方法> 同封の郵便振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。単品でのお申込みは希望の号数記入もお忘れなく！

口座番号 00920-8-320343 加入者名 イマージュ・劇団態変

金満里ソロ公演・アイホール提携公演 漆黒の赤

作・演出・芸術監督 金満里

書 華雪

演奏 蝦名字摩（津軽三味線）

公演日時

2022年

3月11日（金）19:30 ★

3月12日（土）14:00 / 18:30

3月13日（日）13:00

※受付開始は開演60分前、開場は開演30分前

★の回は終演後アフタートークを行います。

平田オリザ（劇作家・芸術文化観光専門職大学学長）

×金満里

会場

AI・HALL 伊丹市立演劇ホール 兵庫県伊丹市伊丹2丁目4番1号

チケット（全席自由）

【前売り】 一般 3,500円 障害者／介助者 3,000円

22歳以下 2,500円 12歳以下 1,000円

【当日】 4,000円

チケット購入方法

①カンフェティ

<http://confetti-web.com/kimmanrisolo/>

TEL 0120-240-540（平日10:00～18:00）

②アイホール（電話予約のみ） ※当日精算

TEL 072-782-2000（9:00～22:00／火曜日休館）

③劇団態変 ※当日精算

<http://www.asahi-net.or.jp/~tj2m-snjy/form/ticket2.html>

TEL 06-6320-0344（留守番電話の場合はお名前と電話番号をお残してください。）

※本公演は、アイホールの「イベントホール利用案内」に基づき感染対策を講じて開催します。

ご来場にあたり、以下をご確認のうえ、ご協力くださいますようお願いいたします。

http://www.aihall.com/raiyo_info/

最新情報は公式ホームページでも
随時お知らせしてまいります。



表紙写真 Hideto Maezawa / 上 Kohji Fukunaga(Studio Epoque) / 下

編集人（返送先）：イマージュ 金満里 小泉ゆうすけ 仙城真 和田佳子

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路1-15-15

tel/fax 06-6320-0344 e-mail taihen.japan@gmail.com 定価 50円

発行人：関西障害者定期刊行物協会／大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4F